

Title	トマス・ ホジスキンの資本観 : トマス・ ホジスキンの経済学研究 (二)
Sub Title	Thomas Hodgskin's view on capital : a study on Thomas Hodgskin's political economy (2)
Author	神代, 光朗
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.8 (1968. 8) ,p.909(75)- 920(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19680801-0075
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680801-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

潤はその地域の公共体の税金に反映し、現実の法人税のごとく本社所在地の税収が過大に計上されるということは免れよう。酒税にしても、本社の所在地ではなく、各地域の最終的な酒購入者の負担を反映するように調整されている。そこで、これらを調整国税および各都道府県・市町村に帰属せしめる。表11では、この調整国税からここで廃止を仮定している交付税、譲与税、国庫支出金を差し引いた金額が、(B-C)としてあらわれ、これは国税をすべて地方に移したばあいの各都道府県の独立財源となるものである。その結果は、表であきらかなごとく、現在の財政力水準を維持できない道府県が二四団体にも達し、これらはいずれも財政力水準がもとと高くない団体であるということに気づくであろう。しかも財政力水準の高い団体は、東京、大阪をはじめとして、かえってより多くの新規財源をうるという結果に終わることに注目せねばならない。すなわち、地方独立税の充実のため各地域の国税をすべて地方税にふりかえても、地域間の所得格差水準が現状のままでは、地方財源対策はいまだ成功への道を約束されていないとみななければならないのである。

(以下次号にて完結)

研究ノート

トマス・ホジスキンの資本観

——トマス・ホジスキンの経済学研究(二)——

神代光朗

はしがき

一、資本の不生産性について

(1) 流動資本と固定資本

(2) 流動資本の不生産性

(3) 固定資本の不生産性

二、資本の不生産性の論証より生ずる諸結論

(1) 資本家の側における労働者のための生活手段の貯えと

いう概念(いわゆる貸銀基金説)の批判

(2) 利潤の不当性

(以下つづく)

はしがき

本稿においては、トマス・ホジスキンの資本観を論ずることにする。既に拙稿『トマス・ホジスキンの生産力論』(『三田学会雑誌』第61巻第5号)において述べたように、ホジスキンは、労働の生産物の巨額な部分を資本家が利潤の名のもとに取得し、その結果労働者が貧困な状態にある事実を認識して、利潤の正当性を否定し労働こ

トマス・ホジスキンの資本観

そがすべてを受け取らねばならないということ(全労働収益権)を労働者階級を擁護するために論証しようとした。そのために彼は、資本家が労働者を搾取すること及び労働者の貧困を正当化する資本弁護論と理論的に対決することをせまられた。そしてこのような資本弁護論の実体をなしていたものは、資本蓄積を国富の増進の原因とし、資本の生産力とそれに対する当然の報酬としての利潤を主張する学説、マルサス流の人口論、収獲遞減の法則、貸銀基金説などであった。本稿ではホジスキンのこのような諸学説を批判することによって資本をどのように把握したか、特に生産関係としての資本の本質にどの程度まで接近することが出来たかを検討することにする。

一、資本の不生産性について

労働者は道具も原料も生活諸手段も持っていないのだから、彼らが生産をし生活することが出来るのは資本家がこれらの固定資本や流動資本を労働者に前貸して、労働者の生活及び生産を助けるから

であり、従って、この前貸に対して、或はその際の資本の効果(資本の生産力)に対して、資本家は当然利潤を受けとる権利があるというのが、ミルやマカロックら資本弁護論者の見解であった。⁽¹⁾ ホジスキンは彼の課題を達成するために、まず、このような見解と対決するのである。即ち、利潤は資本の生産力に対する当然の報酬として正当化されているのだから、利潤の不当性を証明するためには資本の生産力という概念を論駁すればよいと彼は考える。そこで彼はまず、資本の不生産性の論証から議論を展開してゆくのである。

注(1) 『マカロック氏は言う。『固定及び流動資本双方の蓄積と利用はどの国民でも文明度を高めるのに必要不可欠である。そして富が多量に生産され普遍的にゆきわたるのはそれらの結合した強力な作用によってのみである。』(Thomas Hodgskin, Labour Defended, p. 33 (Cole)).

安藤悦子訳『労働擁護論』(世界思想叢書全集5、イギリスの近代経済思想) 河出書房新社、三五〇頁。
鈴木鴻一郎訳『労働擁護論』(世界古典文庫35)日本評論社、二七頁。

「これらの諸効力についてのミル氏の説明は、そんなに詳細ではないけれども、さらに一層驚くべきものである。『労働者は原料も道具も持っていない。これらのものは資本家によって彼のために提供される。勿論のこと、資本家はこの提供をなすことに対して報酬を期待する。』と彼は言う。」(Ibid., p. 34. 安藤訳三五〇頁。鈴木訳二八頁。)

ンにあつては、もともと価値と使用価値の明白な区別もなく、価値は結局、使用価値に解消されてしまうのだから必然的にそうならざるをえないといえよう。

固定資本に関しては、『労働弁護論』においては、「固定資本は労働者が作業に使用する諸道具及び諸用具、彼がつくり運転する機械及び彼が彼の作業を容易にするためか又は生産物を保護するために用いる建造物から成りたつてゐる。」と述べられている。又『人民の経済学』においてはスミスの見解に従つてゐる。即ち、第一に、労働を容易にし或は軽減する有用な機械及び工具。第二に、収入を獲得する諸手段であるすべての有益な建造物(店・倉庫・救済倉・農場・及びそれらにともなう必要な建造物・馬小屋・穀物倉)。第三に土地の諸改良(改良・排水・開い込み・施肥・土地の耕作にとつて最も好都合の状態にすること・これらにおいて有益に計画されたもの、例えば、橋・道路・運河等を含む)。第四に、社会のすべての人々及び諸成員が習得した有益な諸能力。ホジスキンはスミスのこの叙述の第四を特にすぐれたものとしているが、これは彼が結局、固定資本を熟練労働に解消する彼の人間尊重主義を示すものとして興味深い。又、固定資本に関して収入を獲得する諸手段という規定を含めてゐることは注目に値する。彼はこのことに特に目をつけてゐるのであつて、これは資本についての彼の後の叙述で重要なものとなる。⁽⁵⁾ いずれにしても彼は固定資本についても素材的な分類をしてゐるのみであり、資本価値の流通様式における特徴を理解してゐないことは流動資本についてと同様である。

トマス・ホジスキンの資本観

(1) 流動資本と固定資本

ホジスキンは資本の不生産性に関するこの論証においてやはり伝統に従つて流動資本と固定資本を区別することから出発する。⁽¹⁾

流動資本に関して、『労働弁護論』においては、もっぱら労働者の消費資料が考えられていて原材料などが除かれているが、従つて、彼は事実上は可変的流動資本の物的諸要素のみに限定しているが、これは彼が『労働弁護論』で問題にしたことが、とりわけ、このような流動資本の不生産性を述べることによつて、賃銀基金説的な考え方を批判しようとしたからである。『人民の経済学』においては彼はジェイムズ・ミルの『経済学綱要』の見解をそのまま自身の見解にしてゐる。⁽²⁾ 即ち、ここでは流動資本として、原材料、修理費、労働者の生活手段(或は労賃)があげられてゐる。これらは生産における寄与において必然的に消費され、生産者が生産を継続するために絶えず再生産されなければならない諸商品、具体的には石炭・石油・染料・種子・パン・衣類・ミルク・肉・ビール等があげられてゐる。流動資本に関するこの規定においては、ホジスキンは従来の経済学者達と全く同じ立場に立っており、従つて同じ誤まりを彼らと分かちあつてゐる。つまり資本をその素材的要素である物と同一視してゐる。又、彼においては流動資本概念が不明確である。『人民の経済学』では、生産において消費し絶えず再生産されなければならないという特徴が感性的にはつかまれているが、資本価値の流通様式の特徴(勿論これは使用価値の消耗の仕方によって規定されるが)が理解されていない。もっとも、このことはホジスキ

注(1) Cf. Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 286. (S. 319). [322]. なお()はカウツキ

一版頁。〔 〕は改造社マル・エン全集十一巻訳頁。

(2) Cf. Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 239—240.

(3) Hodgskin, Labour Defended, p. 52. 安藤訳三六〇頁。鈴木訳四二頁。

(4) Cf. Hodgskin, Popular Political Economy, p. 239.

(5) ホジスキンは、資本はその所有者に利潤を与えるという特性によつて資本と呼ばれるのだということを述べてゐる。その際、スミスの『所有者に収入を与えるもの』という概念をひきあいに出してゐる。Cf. Hodgskin, Ibid., p. 241.

(2) 流動資本の不生産性

先に述べたようにホジスキンは流動資本の不生産性の論証に際しては労働者の生活諸手段についてのみ論じてゐる。彼によると流動資本の唯一の利益は、それによつて労働者が、現在の生計を保証されるので彼の能力を最も有利なことに向けることが出来ることだといふ。⁽¹⁾ それでは、この保証は何によるのか。生活諸手段の形をとつた諸商品(流動資本)の貯蔵によるのか、それとも他の原因によるのか。勿論、労働者がこのような生活諸手段を自ら貯えているわけがないから、結局、問題は流動資本の利益とされたこの保証が資本家側での生活諸手段の形をとつた商品(流動資本)の貯蔵によるのか否かということになる。ここでは明らかに賃銀基金説的な考え方に對する批判が意図されてゐる。

「私はこの保証が人間の構造における一般的原理から生ずるということ及び、流動資本という名のもとに諸商品の蓄積に帰せられている諸効果は共存労働によってひきおこされることを示すべく努めるであろう。」⁽²⁾ ホジスキンは出発点においては流動資本を生活諸手段と同一視しながらも、流動資本というのは特殊な諸商品につけられた名前であるとしている。このことは彼が流動資本という概念の中に即、目的にはあるが、生活諸手段とは異質的なあるものを感じとつていたことを示している。⁽³⁾ しかしながら、彼は資本を生産関係として扱えられず、資本関係が如何にして物象化してくるかを理解していないから、流動資本と生活諸手段とが混同されてくることを批判せずに、むしろ、生活諸手段の貯えそのものの効力を批判するという形で論理が展開される。⁽⁴⁾ そして、その結論として彼は流動資本には何の効力(生産力)もないと主張するのである。彼は労働者の食糧であるパン・ミルク・肉・ビール・茶・労働者の衣類を例にして、これらは消費されるまでの間、部分的にはわずかの期間、貯蔵されるものがあるとしても、それらは共存労働(Co-existing Labour)によって絶えず生産されているのであって、決して、労働者が消費する前に資本家の手もとにあらかじめ貯えられることはないこと、特に一年以上に及ぶ生産期間をもつ諸部門の労働者についてはましてそうであつて、彼らは彼らの資本家が流動資本の蓄積を行つてから労働を継続しうるのではなく、彼が労働をしていく間に、同時に他の部門の労働者が彼の食糧や衣服を生産し、従つて、自身では食糧や衣服を生産しないにもかかわらず、資本家が

労働者に与える貨幣賃銀を彼がもつている場合にはいつでもそれらの生活諸手段を購入し獲得することが出来るという確信にもとづいて、自分の労働に専心出来るのであると主張する。⁽⁵⁾ 従つて結局のところ、通常、流動資本の名目で諸商品(生活諸手段)の貯えに帰せられている効果はすべて共存労働によるのであるという結論になる。これが流動資本の生産性に反対する彼の結論である。

しかし、彼のこの結論(流動資本は不生産的である)は積極的に評価されるべきであるとしても、この論証自体は誤まつている。即ち、これは実際のところは、現在の生きた共存労働(Co-existing Labour)に比べれば生活諸手段の貯え(過去の蓄積された労働)は労働過程において全く意味をなさないし、又、そのような貯え自体が存在しないということを主張しているのであつて、労働過程に、関しては対象的諸条件の過小評価であり誤まつた推論である。このことは労働過程そのものに対する認識の不充分から生ずるものである。つまり、諸商品は一面ではホジスキンのいうように、あらゆる生産諸局面において同時に共存労働によって生産されている。これは過程が社会的分業にもとづいて行われている場合には、それを再生産過程として、個々の商品の孤立した生産過程としてではなく、全体的な広がり流れにおいてみるならば当然のことである。しかし、同時に諸商品はある生産局面から他の生産局面に入りこみ、そこで原料として或は半製品として生産的に消費され最終生産物に入りこんでいくのである。従つて諸商品は同時に、且つ、継起的に生産される。従つてこのことを認識するならば先行労働の生産物

は現在労働の生産物と同じく生産的であることがわかるはずである。⁽⁶⁾ ホジスキンのこの誤まりは、彼が流動資本のうち、労働者の生活諸手段にあたる部分のみをこの論証においては取り扱い、原料、補助材料等を除外してしまつたために生産的消費における先行労働の役割が看過されたともいえる。しかし、仮に生活諸手段にしたところで、それが最終生産物になるまでの間は原材料や半製品として過渡的諸局面に存続するわけである。⁽⁷⁾

ホジスキンの資本の不生産性に関するその論証において結局のところは失敗しているのは、彼が経済学者達と同じように資本の生産過程(価値増殖過程)と労働過程を混同し、資本を生産関係として扱えずにその物的素材と同一視していることから生ずるのである。彼はまず資本の生産性を云々する場合、それが価値についてなのか、使用価値についてなのかを区別していない。⁽⁸⁾ 本来ならばこれは当然価値に関する問題である。にもかかわらずホジスキンのにおいては価値形成過程は労働過程と区別されず、むしろ前者が後者に還元されてしまうから、彼は資本の生産性に関する問題を、結局労働過程における使用価値生産の問題に解消してしまうのである。資本は労働手段や原料や生活手段ではない。それは、これらの労働の客観的諸条件が非労働者の手中に集積され、単なる労働の諸条件から労働を支配し、搾取する手段に転化した時はじめて資本になるのである。

そしてこの場合、経済学者達においては、通常、二重の混同(Overlap)が生じる。⁽⁹⁾ 一方では資本は一つの関係から物に転化する。つまり諸商品は労働過程において役立つ限りで資本と呼ばれ

る。他方では事物が資本に転化する。即ち、それらの事物が労働過程で有用な働きをするということが、資本という特性つまり他人の労働を支配し、それを搾取するという特性をぬきにしてはありえないということである。ここにおいて労働の生産力は労働を支配し搾取する力に転化し、資本の生産力として現象するのである。だからホジスキンのこの二重の混同を説明することが出来たならば、彼は資本の生産力として現象しているものは、つまるところ労働の生産力の転倒にすぎないということを簡単に理解出来たはずである。ところが彼はそれを理解せずに経済学者達と同じ前提にたつて出発したために、資本の生産性を労働の生産性に還元するのに先のような回り道をしなければならなかつたのである。しかも、その論証たるやそれ自体としては誤まつている極めて粗雑な論証であつた。⁽¹⁰⁾

しかしながらホジスキンの労働過程の対象的諸条件即ち過去の蓄積労働に対して、現在の労働を重視し、前者を過小評価したことは、それ自体としては誤まりであるとしても、現在の労働が資本に對立しているのであり、過去の労働が資本形態をとつて現象するのだから、マルクスによって「一般に現在の労働を過去の労働に対するその重要性において把えることは、即目的にも向目的にも極めて重要な契機である。」⁽¹¹⁾といわれるのであり、このことが却つてホジスキンの資本物神にたち向かう上で貢献しているのである。いずれにしても、彼が経済学者達と同じ出発点にたちながら反対の結論に達したということは、彼が即、目的にはあれ、資本を生産手段や生産手段とは異質のものであるということを認識していたからである

5.

注(1) Cf. Hodgskin, Labour Defended, p. 36. 安藤訳三五二頁。

鈴木訳一九頁。

(2) Hodgskin, *ibid.*, p. 38. 安藤訳三五二頁。鈴木訳三一頁。

(c) Cf. Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 266. (S. 319). [322].

(4) ホジスキンのこの論理展開がマルクスによって『方向転換』(Wendung)といわれるものである。鈴木鴻一郎氏はこれについて、「いかえれば、ホジスキンは資本の生産過程にたいして労働過程を無媒介的に対置し、そして労働過程としての労働過程が資本の生産過程という形態をとることの不当を強調するというよりも、むしろ労働過程そのものを取り上げ、現在の労働にたいする過去の労働の重要を否定せんとするかの如くであったのである。」(経済学説全集4、『古典学派の批判』第五章トマス・ホジスキンの二八四頁。河出書房)と述べている。

(10) Cf. Hodgskin, *op. cit.*, pp. 38—52. 安藤訳三五二—三六〇頁。鈴木訳三一—四二頁。

(9) Cf. Marx, a. a. O., SS. 276—278. (SS. 333—336). [334—336].

(7) Cf. Marx, a. a. O., SS. 278—279. (SS. 335—336). [336].

(8) Cf. Marx, a. a. O., S. 265. (S. 318). [321].

(6) Cf. Marx, a. a. O., SS. 270—272. (SS. 325—326). [327—328]. なお鈴木鴻一郎氏はこの二重の混同について「ホジスキンは『物を資本に転化せしめる』第二の *Quäproquo* はこれを間違ひなりとして否定するものであった。」(経済学説全集4、『古典学派の批判』第五章トマス・ホジスキンの二七九頁)と述べているが、これはホ

ジスキンの資本物神批判の特徴を述べているものといえよう。

(10) 「かれの『証明』をもってしては、次のような反駁に答えることは困難であった。『資本は労働の助けがなければなされることをなしえないともいわれるなら、私は答える。労働は資本の助けがなければなされることをなしえないだろう。』」(平尾敏「資本と剰余価値」——トマス・ホジスキンの批判——『法経論集』二七号一〇七頁(七))

(11) Marx, a. a. O., S. 291. (S. 352). [350].

(3) 固定資本の不生産性

固定資本についても、その論証の仕方は流動資本の場合と本質的には変わらない。彼は固定資本と解されている労働諸手段が、労働の生産力に大なる貢献をなすことを認めている⁽¹⁾。しかし彼は固定資本がもっているこのような効用は何によるかということにおいて経済学者達と異なっている。経済学者達は固定資本の効用はそれが蓄積された過去の労働の生産物であることによると主張しているが、そうではなくて、それは現在の生きた労働によってその効力を發揮するのであるとホジスキンは主張する⁽²⁾。いかなる諸用具であれ、それらは製造された後にどんな効果をもつか。何もまたない。反対に「労働によって用いられ或は応用されないならば、それらは錆びるか朽ちはじめる⁽³⁾」。彼はこのことを経線儀、船舶、道路、蒸汽機関などを例にして説明している⁽⁴⁾。そして結局、労働者が使用する用具の効用は、労働者の熟練と知識と労働に還元される。彼は一国民が固定資本を持ち利用するには三つのことが必要であると述べている。第

(4) Cf. Hodgskin, *ibid.*, pp. 56—61. 安藤訳三六三—三六五頁。鈴木訳四六—四九頁。

「大工は手斧と鋸がなければ何をすることができるといふことが、従来問われてきた。私はその質問を逆にして、大工がいなければ、手斧と鋸は何をすることが出来るのかと問う。鋸と腐朽がその答であるに違いない。」(Hodgskin, *ibid.*, p. 61. 安藤訳三六五頁。鈴木訳四九頁)

(5) Cf. Hodgskin, *ibid.*, pp. 63—65. 安藤訳三六六—三六七頁。鈴木訳五一—五二頁。

(6) 「ある用具が生産的資本とみなされるかどうかは、それが有る生産的労働者によって用いられるか否かに全く依存している。」(Hodgskin, *ibid.*, p. 57. 安藤訳三六三頁。鈴木訳四六頁)

二、資本の不生産性の論証より生ずる諸結論

ホジスキンは以上の如き、粗雑な論証によってではあるが資本の『不思議な特性』(wonderful properties)を暴露し、資本の生産力といわれているものは、実は労働の生産力に他ならないという結論に達した。勿論、彼の論証によっては、労働の生産力は何故資本の生産力として現象するかということが説明しえなかつたが、ともかく資本の不生産性の論証から彼はいくつかの重要な結論に到達している。

注(1) Hodgskin, Labour Defended, p. 32. 安藤訳三四九頁。鈴木訳二六頁。

(1) 資本家の側における労働者のための生活手段の貯えとい

一は、機械を発明するための知識と発明力であり、第二は、これらの発明を実行にうつすための手の熟練と器用さであり、第三はそれを使用する熟練と労働である⁽⁵⁾。かくして、固定資本は何らそれ自体としては生産的ではなく、それらが生産的資本とみなされるかどうかは、それが生産的労働者によって使用されるか否かにまったく依存しているのである⁽⁶⁾。

このようにして、ホジスキンは資本が生産力をもっているという経済学者達の見解を論駁し、資本の生産力を流動資本は共存労働に、固定資本は熟練労働に、要するに生産的労働の生産力に還元したのである。

注(1) 「疑いもなく、これらの諸用具を用いることによって、人は彼らの力をおおむね増加する。」(Hodgskin, Labour Defended, p. 52. 安藤訳三六〇頁。鈴木訳四二頁。) Cf. *ibid.*, pp. 52—53. 安藤訳三六〇—三六一頁。鈴木訳四二—四三頁。

(2) 「すべての用具及び機械が労働の生産物であるということは、資本の要求のために最も熱心にたたかっている人々によってさえも認められている。しかしながら、彼らはそれらが先行労働の生産物であり、それらが節約され或は貯えられてきたが故に、利潤をうけとる資格があるのだとつけ加える。」(Hodgskin, *ibid.*, p. 54. 安藤訳三六一頁。鈴木訳四三頁。)

(c) 「固定資本はその効用を以前ののではなく現在の労働からひき出す。」(Hodgskin, *ibid.*, p. 55. 安藤訳三六二頁。鈴木訳四四頁。)

(e) Hodgskin, *ibid.*, p. 56. 安藤訳三六二—三六三頁。鈴木訳四五頁。

トマス・ホジスキンの資本観

う概念(いわゆる貨銀基金説)の批判

ホジスキンの生活手段の貯えは存在しないと主張する時のこの貯えは、単に市場における生活手段の商品としての存在を意味しているのみであって、そのようなものとしての貯えは常に存在しているのである。⁽¹⁾なぜならばこれらの諸商品の購買者は常にそれを市場で見出さねばならないのだから当然のことである。そこには資本・賃労働関係は全く存在して、単に購買者(貨幣所有者)と販売者(商品所有者)が相対峙しているのみである。しかしながら、ホジスキンのとっては、問題は「流動資本という名の下に諸商品(生活手段—神代)の蓄積に帰せられている諸効果」の検討であり、結局は資本家の側における労働者のための生活手段の貯えという概念の批判だったのである。もともと、このような概念の意味することは次のことである。⁽²⁾即ち、労働者は労働力を商品として販売し、資本家から貨幣賃銀をうけとって、それでもって市場にある諸商品(生活手段)を購入するのであるが、そして、まさにそのような諸商品は市場に貯えられているのであるが、資本制生産においては、労働者が生産する労働手段や生活手段は一旦、すべて資本家の所有(商品資本)となり、労働者はその生産物の一部(労働力の価値に相当する)を買い戻さなければならないので、あたかも労働者のために資本家の側で生活手段が貯えられているかの如くみえるのである。⁽³⁾つまり労働者が彼の収入(労賃)で市場にある生活手段を購入し消費する過程には、何ら資本・賃労働関係は存在しておらず、商品の販売者と購買者の関係のみがあるにもかかわらず資本家の側から

みればこの過程は可変資本の現物形態としての労働力の再生産過程としての意義を有するのであり、しかもその際、彼は市場で商品資本としての生活手段を売るのであるから、この過程は依然として資本の生産過程の一部とみなされ、生活手段は流動資本とみなされるわけである。⁽³⁾このことによつて「流動資本という名の下に」生活手段が資本家の側に貯えられることになる。しかも、一方ではこの生活手段の量が収獲通減の法則と結びついて一定量に限定され(いわゆる貨銀基金説)、又、他方ではそれとマルサスのな人口法則とが結合して労賃は常にぎりぎりの生存費におしきげられるという理論が生じてくる。ホジスキンの対決したのはこのような理論に対してである。人口法則と収獲通減の法則についてはホジスキンは既に述べたように、人口増加—収獲通増の図式をもつて対決した。⁽⁴⁾そこで、残された問題が資本家の側での生活手段の貯えという概念の批判である。

ホジスキンは、資本家はこのような貯えを持ってはいないと結論する。その際、彼はあたかも商品の貯え一般が、即ち市場における商品の滞留現象が存在しないかの如き、或はほとんど存在しないかの如き論証を先に述べたように行っている。そして生活諸手段は貯えられることなく共存労働によつて生産されるというのである。⁽⁵⁾ここではホジスキンは市場における商品の貯えと、資本家の側での労働者のための商品の貯えとを混同し、後者を否定せんとして前者を否定し、それで万事うまくいったと思つたわけである。労働者が特定の資本家の下で労働をし、労賃をうけとって市場

で生活諸手段を購入するこの過程においては、労働者は先行労働及び現在の労働ばかりでなく未来の労働にも依存していることになる。⁽⁶⁾だから、ホジスキンの解答を与えねばならなかった問題についていえば諸商品が過去の労働によるのか、現在の共存労働によるのかはいつでもよいことである。⁽⁷⁾しかしながら、や、と曰々の需要を充足しうる労働者にとっては、「総じて、生産及び消費はますます同時的になる。それ故に全社会を考察すれば、消費はすべて、ますますその同時的生産に或はむしろ同時的生産の生産物に依存している……」⁽⁸⁾つまり、労働者が彼の生活手段を常に市場で諸商品として見出さねばならない限りは、この諸商品はそれらを購入する労働者の労働(その価格で彼はそれらを購入する)に対しては決して先行しない労働、しかしながらその生産物としての存在には先行する労働の生産物、かかる意味において同時的労働或は共存労働の生産物でありうる。⁽⁹⁾その意味においては、ホジスキンの見解は資本制生産の市場における諸現象を正しく反映しているわけである。

だが、重要なのは彼のこの論証のものではなく、そこで彼が到達した結論である。「彼(資本家—神代)は貨幣を所有している。彼は他の資本家達に対して信用を所有している。彼は法律の聖化のもとに、奴隷の子孫たる労働者の労働を支配する権力を所有している。しかし彼は食物や衣服を所有していない。彼は労働者に貨幣賃銀を支払う。」⁽¹⁰⁾さらに、「資本家が他の労働者達を維持し従つて雇うことが出来るのは、彼がある人々の労働に対して有している支配権によるのであつて諸商品の貯えを所有していることによるのではな

トマス・ホジスキンの資本観

い。⁽¹¹⁾ここでは、ホジスキンは、資本家は労働者に貨幣賃銀を支払うが生活手段の貯えをもっているのではないこと、又、労働者は資本家の側における諸商品(生活諸手段)の貯えに従属しているのではなく、資本家の労働に対する支配(彼はそれによつてひきおこされる疎外現象という結果しかみていないが、事実上は資本・賃労働関係)に従属していることを指摘している。そして彼は、生産的労働者の数は流動資本の量に依存しているが、この量は固定資本の質に依存しており、固定資本の能力は知識と熟練が増加することによつてますます高まる。⁽¹²⁾従つて、流動資本の量(生活手段の量)は増加し、労働者数にとつての自然的制限(従つて又、自然法則としての人口過剰)はないと考へるのである。彼によれば、これを制限しているものは資本(人為)であり、資本による生産の抑制なのである。⁽¹³⁾

(1) Cf. Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, Dietz Verlag Berlin, 1962, S. 279. (SS, 336—337). [337].

(2) Cf. Marx, a. a. O., S. 289, S. 291. (S. 348, S. 349, S. 351). [347, 347—348, 349—350].

(3) 玉野井芳郎著『リカアドオからマルクスへ』(古典経済学批判史)新評論社一一五—一一六頁参照。

ここで玉野井氏は貨銀基金説についてとりあげ、ホジスキンの主たる課題が、このような見解を批判することであつたと述べている。

(4) 鎌田武治著『古典経済学と初期社会主義』未来社、二二頁、三〇頁、六二頁参照。

(5) 一の(2)の注の(5)を参照せよ。

(9) Cf. Marx, a. a. O., S. 290. (SS. 349—350). [348—349].

(7) Cf. Marx, a. a. O., S. 289. (S. 349). [348].

(8) Marx, a. a. O., S. 290. (S. 350). [349].

(6) Cf. Marx, a. a. O., S. 290. カウツキー版にはこれに該当する箇所はない。

(10) Hodgskin, Labour Defended, p. 33. 安藤訳三五三頁。鈴木訳三一頁。なお、ホジスキンは資本家が労働者に支払うこの貨幣(賃銀)の流通について次の如く述べている。

「親方製造業者は、彼がそれで賃銀を支払うべき貨幣或は紙幣を持っている。これらの賃銀を彼の労働者は他の労働者達の生産物と交換する。これらの労働者は(それが貨幣であれ、紙幣であれ)賃銀を保持していない。そしてそれ(貨幣)は製造業者に戻ってくる。彼はそれと交換に彼自身の労働者達の作った布を与えるのである。それをもって、再び彼は賃銀を支払い、貨幣或は紙幣は、再び同じ回転をするのである。」(Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 248—249.)

又、同様のことを次のようにも述べている。「例えば、親方木棉紡績業者は、彼の労働者達に一定量の肉とパンを得るための・近所の肉屋及びパン屋への注文(Order)に等しいものを与える。そして彼は、肉屋及びパン屋に一定量の木棉の布を与えることによつて、この注文を買い戻す。もし彼が一定量の貨幣を与えるのならば、恐らく彼は、彼の労働者達が彼から与えられるものを支出するところの肉屋及びパン屋からそれを直接に得たりはしないだろう。しかし彼はそれを市場で彼の布を売ることによつて得るのである。」(Ibid., p. 247.)

されるときには正にその増加のせいになされているのだが、そのような場合には、彼らの生産力におけるこの巨大な増加が彼らの数における増加の結果だと、なかなか信じないだろう。」(Hodgskin, op. cit., p. 120.) (傍点神代)

しかし、ホジスキンは資本の有機的高度化の問題との関連で、この過剰人口の問題が考えられていない。

(2) 利潤の不当性

ホジスキンにとっては利潤の不当性を論ずることは最も中心的な課題であった。一八二五年に出された匿名(一労働者著)のパンフレット『労働弁護論』はこの課題を達成するために書かれたのである。資本家やそのイデオログ達は、先にミルやマカロックにおいてみてきたように、資本を生産手段や生活手段と混同するのみならず生産手段や生活手段の効用を資本の効用と混同し、資本は生産におけるこの協力に対して当然、巨額の利潤を受けると資格があるというのである。これに対してホジスキンは資本は不生産的であるという彼の結論からして、もはや資本が利潤をうけとる正当な根拠は何もないと考える。それでは資本家はいかにして利潤を取得しているのだろうか。「兩種の資本(流動資本と固定資本—神代)の効用の程度と性質は、全く異なっておりはつきり区別される。労働者はいわゆる流動資本で生活する。彼は固定資本で仕事をし、しかし、これら兩種の資本の等量すなわち等しい価値はそれらの所有者に正確に同じ額の利潤をもたらす。」⁽¹⁾そして、「我々はこの唯一の事情から、全

トマス・ホジスキンの資本観

これらの中には可変資本価値の流通に関する注目すべき見解がみられる。

(11) Hodgskin, Labour Defended, p. 52. 安藤訳三六〇頁。鈴木訳四二頁。

(12) Hodgskin, ibid., p. 68, p. 69. 安藤訳三六九頁。三六九—三七〇頁。鈴木訳五五頁。

(13) 「資本家が、彼はすべての生産物の所有者であるが、その彼が労働者の生活手段をこえて、それ以上に利潤を得るのだから、労働者をして諸用具を作ることにも利用することも認めないであろう場合には、諸限界が、自然が命ずるずっと内部に生産的労働に対しておかれていることは明白である。第三の部分の手に資本が蓄積されるにつれて、資本家によって得られる利潤の総額はそれだけ増加する。そしてそれだけ、生産と人口に対する人為的制限が生ずるのである。」(Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 245—246.)

なお、生産の制限としての資本に関するホジスキンの見解は、マルクスの『経済学批判要綱』で引用されている。

Cf. Karl Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 319, S. 320. 邦訳三四五頁。三四六頁。

又、ホジスキンはある箇所、労働者の数が過剰と考えられ、人口論的な考え方が生じてくるのは、結局は、労働者の数が資本家の労働への需要とのみ比較されるからであると主張して、資本主義的過剰人口を示唆している。「私が思うに、社会の労働階級は、彼らの貧困が一般に彼らのあまりにも急速な増加のせいになされている場合には、そしてその増加が彼らの用役への資本家の要求とだけ比較

く次のことを確信してよいだろう。即ち、資本家によって固定資本の使用のために要求される分け前は、労働の効力を増加する諸用具から、即ちこれらの諸用具の効用からひきだされるのではない。そして、いずれの場合にも、利潤は流動資本を消費し、固定資本を使用する労働者に対して資本家が所有している権力からひきだされる。このようにして、ホジスキンは利潤は資本の効用(資本の生産力)によるのではなく、労働に対する資本家の支配によると主張したことは、資本の本性へ接近し利潤の源泉を説明するためには、非常に積極的な意義を有しており高く評価されるべきことである。なぜなら、先にも述べたように、ホジスキンは労働に対する資本家の支配権という表現の中で、資本制的生産関係から生じてくる疎外現象を認識しているからである。⁽³⁾しかし、依然としてこの認識は、資本制的生産関係の結果を認識したにとどまっておき、このような支配がいかにして生じてくるのかということ、即ち労働力と生産手段の分離の過程は解明されていない。

ホジスキンにおいては、自然と人為の対立という非歴史的方法、自然史的歴史観が必然的に彼の理論的限界を規定している。利潤取得を正当化する資本の生産性という唯一の根拠が失われた今、資本家はもはやそれを要求する正当な権利をもっていない。「正義の目からすれば、諸用具を製造する人は彼が用いる労働に比例して、それらの諸用具を使用する人と同じだけの報酬をうける資格がある。しかし彼はそれ以上を得る資格はない。そして、それらの諸用具を製造も使用もしない人は生産物のいかなる部分といえども正当な要

求を何も持っていない。(4)。(傍点神代)

このようにして資本家の利潤取得は、彼によれば不正義の取得であり、自然法に対する人為的侵害、即ち全労働収益権に対する侵害なのである。従って又、資本家の労働者に対する支配権の内容も、このようなものとしてしか把握されておらず、この支配権そのものが歴史的に如何にして発生してきたのかは究明されていない。だから、この資本家の労働者に対する支配は封建領土の農奴に対する支配と、従って又、利潤取得は封建的地代取得と本質的には異なるものとして把握されていない。「彼(資本家—神代)はいかにしてこの権力を獲得したのかについては、私は今は次の如く述べるより以上には考察しないだろう。即ち、それはある時期に若干の人々によってこの国の全地表が占有されたということに由来している。そして、ヨーロッパ中どこでも同じだが、この国においてかつて労働者が生存していた奴隷状態に由来している、ということである。」結局、ホジスキンはこの問題についてはどこでもこれ以上のことを言っていない。

しかし、ホジスキンはこのような考え方の上にはあるが、『労働弁護論』と『人民の経済学』では、現実の資本主義社会における資本と労働の関係に焦点をあわせたことによって、さらに資本の本質把握に向かつて接近しているのである。

注(1) Hodgskin, Labour Defended. p. 70. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六頁。

(2) Hodgskin, *ibid.*, p. 70. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六頁。

書評

E・J・ホップスボーム著

安川悦子・水田洋訳

『市民革命と産業革命』

——二重革命の時代——

飯田 鼎

この書物は、イギリス労働運動史やひろく労働問題の研究で、わが国でも有名なホップスボームの『革命の時代——一七八九年から一八四八年までのヨーロッパ』(The Age of Revolution: Europe 1789-1848, by E. J. Hobsbawm)の邦訳である。訳書では、その内容をとって、市民革命と産業革命の二重の革命の時期としているのは面白い。一七八九年のフランス大革命から一八四八年のフランス二月革命までの六〇年間に、ヨーロッパの人民の生活がいかに営まれたか、そしてそれはまたどのような矛盾や困窮やあるいはまた栄光によつて織りなされていたか、そしてこの半世紀に余る時期は、世界史上どのような意義を担うものであるか、総じて「ブルジョアジーの時代」と呼ばれるこの時期を、きわめて該博な知識と軽妙な筆致をもつて描いており、いわば現代世界史の入門書性格をもつているといえるであろう。といつても問題が多方面にわたっており、原文が、こつているせいもあって、訳文は必ずしも読み易いとはいえない

(3) 鎌田武治、前掲書一三〇頁参照。

なお、マルクスはホジスキンの次の文章について「ここにおいて、ついに資本の性質が正しく把握されている。」(Marx, *Theorien über der Mehrwert*, Teil 3, S. 295, (S. 356), [354])と述べている。その文章というのは次のものである。

「固定資本はその効用を以前ではなくて現在の労働からひき出す。そして、それが貯えられていたからその所有者に利潤をもたらすのではなくて、それが労働に対する支配を獲得する手段 (a means of obtaining a command over labour) であるからその所有者に利潤をもたらすのである。」(Hodgskin, *op. cit.*, p. 55, 安藤訳三六二頁。鈴木訳四四頁)。

ここでマルクスが述べていることは、決してホジスキンの資本を生産関係として把握しているということではない。そうではなくて、その結果としての疎外現象を認識しているという意味でこの一節を積極的に評価しているわけである。

(4) Hodgskin, *ibid.*, p. 71. 安藤訳三七二頁。鈴木訳五七頁。

(5) Hodgskin, *ibid.*, pp. 70-71. 安藤訳三七〇頁。鈴木訳五六—五七頁。

(以下つづく)

ず、五〇〇頁を超える本書を読了することは、大きな忍耐を要求されるといつていいだろう。

著者は、その「まえがき」でつぎのようにいつている。「本書の目的は、詳細な記述ではなくて、解釈なのであり、フランス人が高級通俗化とよぶものである。本書の理想的な読者というのは、つぎのような理論的構成物である。すなわち、過去について好奇心をもっているだけでなく、世界がどのようにして、またなぜ今日のようなものになったのか、それがどこへむかいつつあるのかを理解したいとおもっている、知性と教育のある市民である。したがって、もっと学識ある読者層のためには、当然もつていなければならぬような重い学問的装備を、本文につめこむことは、術学的であるし、要求されもしないであろう。」ここに本書の目的は、はっきりと規定されているのであるが、ただ、本書の特徴は、一七八九年から一八四八年までの時期について、さまざまな革命や動乱の基礎的な、社会経済的な基盤を描くにとどまらず、いわばその上部構造ともいべき文化的・精神的側面をも決して見逃していないことである。すなわち、それらの革命が生み出した、あるいは革命の過程において生み出されたイデオロギー——宗教、芸術や科学についても詳しく考察を行っており、著者の広汎な視野とともに、そのマルクス主義的な立場をよくあらわしているように思われる。

著者が読者に訴えることはきわめて多方面にわたっており、しかも問題のとり上げ方があまりにも実証的であるために、理論的に十分に整理されているとはいえない。そこで筆者は、本書をよんで得